



ゴルゴンゾーラのジャケットポテトをスコッチで

トム・フォードのジャケットスーツを身に着けた1960年代生まれの男性が目の前に現れたならば、わたしはすぐさま恋に落ちるに違いない。

村上春樹の小説のタイトルをかりれば、4月のよく晴れた朝に100パーセントの女の子に出会う気分だ。

糊の利いた白いYシャツにオーソドックスだけれどラインにこだわったトム・フォードのスタイリッシュなジャケットスーツ。

40代男のすこし脂の乗った胸板が白いYシャツにフィットしてそのフォルムがなんともいえず艶かしい。

「男は40歳を過ぎてから」と四半世紀しか生きていない小娘が訳知り顔で語るには差し出がましい気もするが、実際同意する女性が多いのではないだろうか。

今日、映画『シングルマン』を見た。

稀代のデザイナー、トム・フォードの初監督作品である。

1960年代のロサンゼルス。大学教授の初老の男性が、16年間連れ添ったゲイのパートナーを失った悲しみから自殺を決意した日、その一日の物語だ。

映画の感想はあえてかかないが印象的なシーンだけ書かせていただく。

映画がはじまってすぐ、主人公が、大学に出かえるためにスーツに着替えるシーンがある。ネクタイを締め、ジャケットを着、靴を磨き、髪を櫛で整える。音がしそうなほどにピシりと。

また、主人公はイギリスからの移民である設定で、劇中主人公はたびたび死の決意を決めた自分を奮わすためにスコッチ・ウイスキーをあおる。

朝方ピシりと着たスーツもYシャツも夜になるにつれ酔いもまわり、だんだん着崩れていく。

しかし、そのよれたスーツ姿こそコリン・ファースの渋みのある存在感が漂い、そこはかとなく死に向かう醗酵した、なんともいえない演技のコクを出していたのだ。

見終わった後、ゴルゴンゾーラチーズをあえたあつあつのジャケットポテトとスコッチウイスキーが飲みたくなった。

できれば、トム・フォードのジャケットスーツを着た40代男性とご一緒に。

(着崩れていれば尚良し)

イギリス料理

ジャケットポテト

<作り方>

(1) ジャガイモは全体的にフォークで穴を開けておく。

皮の上から油と塩少々をすり込む。

(2) 200度のオーブンで下準備したジャガイモを1時間ほど焼く。

竹串がスーッと通るまで。

(3) ジャガイモを真ん中で割り、上から溶けたゴルゴンゾーラチーズをかける。

※パセリなどをふりかけて

バターやサワークリームなどが定番。

ジャケットポテト

皿に持っても、皮をむかず「着ている」状態のためジャケットポテトと名づけられたそう。



夜はホットハニーレモンを片手に

夜はホットハニーレモンを片手に

「男の人の描く恋愛はどうしてこんなにも美しいのだろう？」

そう、思うことが、しばしばある。

もちろん。決して批判的にではなく、賞賛の気持ちを込めて。

宮本輝の『青が散る』

吉田修一の『春、バーニーズで』

村上春樹の『スプートニクの恋人』（『ノルウェイの森』は言うまでもなく）

それぞれテイストもシチュエーションや誰に恋するかも（それは同性愛でも）

全く異なってはいるのだけれど、総じて美しい。

昨夜、眠る前に

岩井俊二監督の『love letter』を見た。

物語は

中山美穂演じる主人公が、亡くなった恋人の中学時代の卒業アルバムを見て、昔住んでいた住所に（もう国道が通ってなくなっているはずの）一通の手紙を送ることから始まる。

届くはずの無い住所にも関わらず、

死んだはずの恋人の名前、藤井樹で返事の手紙がある。

それは亡くなった恋人と同姓同名の同級生がいたからだった。

とここまではきっとネタばれにはすれすれならないと思うので書いてみる。

ここからがこの映画のストーリーの発展どころだから。

恋愛をファイルの保存にたとえて

【女は上書き保存、男は別フォルダ保存】なんて表現したりすることがあるが

私はこの映画を見終わったとき、

なるほど、もしかすると、男の人が描く恋愛は「忘れられない恋」だから、切なく、美しいのか

もしれない。

なぜかそう少しだけ合点がいった気がした。

ぜひ一度ご覧いただきたい映画だ。

片手には初恋の味ホットハニーレモンで、
甘酸っぱい気分にあびたって・・・をおすすめします。

ホットハニーレモン

作り方

グラスにレモン汁、しょうが汁、はちみつを入れお湯をそそぐだけ

青いパイヤは成長する

青いパイヤは成長する

「青い」という言葉から連想する言葉は未熟、青春、つたなさ。

その「青さ」故、すぐに壊れてしまいそうな不安定さと、またうらはらに瑞々しい生命力。往々にして人はその「青さ」に魅了される。

先日、映画『青いパイヤの香り』を見た。

『ノルウェイの森』の監督トラン・アン・ユン監督のカンヌでカメラドールを取った、出世作である。

あらすじを簡単に述べるとすれば、ベトナムの使用人の少女が大人になる過程を描いた、少女の成長物語である。

多くの古典的な物語がそうであるように、物語の大テーマの一つは「成長」である。

サリンジャーは、『ライ麦畑でつかまえて』で少年の壊れ行く自我の中で「成長」を描いた。村上春樹もまた、そうした成長物語が好きだという。

『ノルウェイの森』は喪失をテーマにした少年の成長物語である。

少年たちの成長物語とは。

想定外な出来事と自分が思い描いた通りには動かない世の中に

抗い、抗いきれず、時に失い、時にその喪失の痛みに耐え、選び取り、男の子達は青い皮を自ら塗り替えて行くものである。

しかし、少女の成長物語はまったくもって違ったものだ、と私はつねづね思う。

少女たちは、「受け入れる」ことで成長していく。

人生における様々な予期せぬ出来事に、おののき、しかし、それを受け入れることで少女は確実に成長するのである。

映画『青いパイヤの香り』で印象的なシーンはなんといっても

青いパイヤを少女が、そして成長して女になった少女が同じように剥くシーンである。

パイヤを半分に切ったときにでてくる、真っ白な種に指先をあて、触れながら、少女時代もそして成長して女性になった少女も同じように、その神秘的にまばゆい視線を送る。

もし。少年たちが、同じように青いパイヤを剥いたならば、マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』の主人公のごとく回想に耽るに違いない。青き日々の自分に想いを馳せながら。

しかし。少女は、ずっと少女のまま、神秘の視線を青いパイヤに送る。

彼女たちは人生を受け入れながら成長するからだ。

それは、ともすれば、人生は自分の意志とは関係なく動くものだというのを、早い

段階から知っているからかもしれない。

受け入れ、そこを深め、籠を大きくし、また受け入れながら成長していく。
だから、少女はずっと少女のままなのである。

映画の最後に、数年来つとめ上げてきた家が貧困になったため、少女は奉公先を突如、解雇され、別の家へと奉公に上がることとなる。

少女は自分のままならない人生にむせび泣く。
しかし、少女は抗わない。
人生に従順に、受け入れる。

そして、また青いパパイヤを剥いては、その真っ白な種に神秘の目線を送るのだった
。



完熟に近いパパイヤ

青いパパイヤは東南アジアではサラダとして食べられる。
青いパパイヤの実はたんぱく質の分解作用があり、肉料理などと合わせると消化促進の効能があるという。
青いパパイヤの種は真っ白である。

日本では完熟したものが果物として売られていることが多い。
その実は、甘みが強く、独特の癖がある。
この時、種は真っ黒に近い。

私は少女の成長を思う。

色々なものを受け入れ、少女はパパイヤの種のように円熟して
黒くなっていく。
その実はまた独特の芳香と甘みを発散し。

しかし、少女の目は少女のままであり、いつまでも青いパパイヤなのだ。

パパイヤのフルーツチーズクラッカー

- 1、クラッカーの上にフルーツチーズをもる。
- 2、その上に切ったパパイヤ（完熟）の実をのせる。
- 3、お好みで、ミントをさらにトッピング。

白ワインのあてにどうぞ。

フルーツチーズは、デバ地下のチーズ売り場などで手に入ります。